1　国　　語　　科

羽場邦子・岩本和貴・谷　栄次

1　国語科における「自立」の基本的な考え方

一人ひとりが自立に向かうためには，自ら学習すべき課題を見つけ，課題解決のための方法を考え，追究するなど「自分の力で学ぶ」ことを重視しなければならない。子どもたちは，ことばを読んだり，書いたり，聞いたり，話したりする活動を通して，「もの」「こと」をとらえる。それを言語活動を通じてより確かに，より豊かなものにしていくことが，国語科における「学び」と考えている。

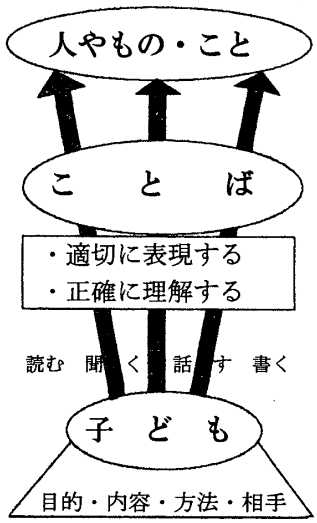
一斉授業における言語活動の場面では，お互いの考えや感じたことをことばを介して伝え合うことで，一人ひとりの学習意欲が刺激されたり，ものの見方が広がったり，考え方に新たな視点が加わったりする。つまり，一人ひとりの「学び」がかかわりあって「学び合い」を生むことにより，さらに「自分の力で学ぶ」ことを確かなものにしていき，「学び」の質的向上を図ることができるのである。

このような考え方を踏まえて，本校では，国語科において「子どもが自立に向かう」ことを次のように定義した。

> ことばを媒体とした主体的な言語活動（読むこと・聞くこと・話すこと・書くこと）を通して，ものの見方・考え方・感じ方をより確かに，より豊かにしていき，自分を見つめ常に向上していこうとする力を身につけていくこと

2　サブテーマ「人やものとかかわることを大切にして」のとらえ方

国語科の学習で子どもたちが出あう「もの」「こと」は教材である。教材と向き合うことで自分なりの課題をもち，話し合いの中で他人や新しい自分の考えと出あい，かかわりあい，ことばとの関係を深めていく。教材に対する意識が高まれば，学習の場で，ものの見方や考え方・感じ方をより一層広げたり，深めたりすることができるだろう。



一斉授業の形態における国語科の学習とは，教材を通じて，ことばを学び，ことばを使い，ことばと向き合うことで，他人のもつ様々な言語活動の経験とかかわりあうことだと考えることができる。そのようなかかわりの中で，自己認識力とコミュニケーション能力を高めることができる。前者は自己のうちに，意見・感想・疑問などの認識を確立できること，後者は自己の認識を他人の認識と比較・対象化して，相違を明らかにしたり，考えや立場を伝えたりできることだと考える。学習指導要領に提示された「伝え合う」力に相当するものと言えるだろう。

このような力が身につくことで，自分自身の言語活動を磨き，より豊かなものにしていくことができるだろう。他人の考えと向き合い，自分自身を見つめる活動を繰り返すことで，自他へのかかわり方の広がりや質的な深まりも期待できる。

具体的な支援として，「なぜ（目的）」「何を（内容）」「どのように（方法）」「だれに（相手）」を明確にし，子どもの「学び」の支えになるような場の設定を工夫したい。また，それが生きて働く

ものになるためには，日常化を図ることが必要となる。表現することを楽しみ，お互いが認め支え合う中で，ことばが磨き合える場を意図的に設定したい。

このような「学び」を積み重ねることにより，子どもたち一人ひとりがことばにこだわりをもちながら，人・もの・こと全てを含む自分を取り巻く世界に主体的にかかわろうとするようにしていきたいと考えている。

3 テーマに迫る授業の具現化

(1) 主体的に「学ぶ」ことをめざして

子どもが主体的に学ぶためには，授業がおもしろくて魅力のあるものにならなければならない。自らが課題をもち，それを解決しようと考え，懸命になって活動しているとき，あるいは，活動をしていて好奇心や問題意識をかき立てられているとき，子どもたちは自然と生き生きとした表情になるにちがいない。そうした授業を実現するために，子どもの側に立った学習過程を重視し，次のことを大切にしていきたい。

①これまでの言語活動から一人ひとりの実態を把握すること
②子どもたちにとって切実で目的意識のある課題になるように支援すること
③課題解決の具体的な方法（学び方）を考える場を保障すること
④自分の考えにもとづいて，解決しようとする主体性を重視すること
⑤ふりかえりの場を設け，学びの成果とさらなる課題を自覚できるようにすること

(2) 「学び合い」による質的な高まりをめざして

「学び合い」を成立させるためには，「伝え合う」力を重視する必要があり，「聞き合い」「話し合い」活動がその中心となる。「合う」ということばの中に，一方通行でない相互理解・相互交流の意味が含まれている。単に相手の話す内容を理解すればよいということではなく，相手の意図などの内面に迫るものでなければならない。さらに，相手に対して自分の思いや考えを伝えようとする姿勢も大切である。そのような「伝え合う」力が「学び合い」を支え，成立させると言っても過言ではないだろう。

実践にあたっては，子どもたちが「学び合い」をすることの価値を実感できるものになることが大切である。子どもたちが価値を実感できるのは，次のような場合と考える。

○自分の思いや考えが認められ，生かされた場合
○自分の思いや考えと違うものに気づき，納得できた場合
○自分の思いや考えがさらに深まった場合

そのために，必要な教師の働きかけとしては，次のことが考えられる。

○何についての「学び合い」かを明確にするために，焦点化すること
○「学び合い」に参加できるように，他人の考えをじゅうぶんに聴き，共通点や相違点を整理し，一人ひとりが自分の考えをもつこと
○「学び合い」が深まるように，自分の考えを明確に表現し，伝え合うこと
○「学び合い」によって明らかになったことについてふりかえる場を保障すること

4 国語科と総合的な学習との連携

総合的な学習でも，様々な場面において言語活動（聞くこと・話すこと，読むこと，書くこと）が重要な役割を果たすことになる。国語科で系統的・継続的に積み上げられてきた力を発揮し，さらに確かなものとして定着を図る場として期待できる。

今，大切にしなければならないことは，国語科と総合的な学習について，ことばの力を培うための相乗効果をもたらすような連携を図ることだと考えている。

4　成果と課題

昨年度までの取り組みの成果と課題として，課題設定における教師の支援の仕方とふりかえりによる「学習課題」の評価のあり方の２点が挙げられた。本年度はそれをふまえた上で，かかわることを大切にした取り組みを行ってきた。ここでは，「国語科の基本的な考え方」項３「テーマに迫る授業の具現化」に沿って，成果と課題を整理してみたい。

(1)　主体的に「学ぶ」ことをめざして（成果○　課題●）

①課題設定における支援の工夫と課題

○日常の生活の中での読む・書く・聞く・話す・考える・話し合うなど，子どもたちの言語活動の実態を把握し，指導計画を立てる。→一人ひとりの個人カードなど。

○十分な題名読み，本文に読み慣れる，初発の感想をもつの時間の保障。

○子どもたち一人ひとりの思いが集約されていく過程のわかる「課題づくり」。
→課題分類の視点。「課題づくり」の過程をていねいに指導し，見通しをもつ。

○不十分だと考えられる課題も取り上げ，修正・改善などを通してよりよい課題に高める経験をする。→低学年では，適切なタイミングでの教師の問題提示・指導が重要。

●学習課題が子どもたち全員のものになっていたかどうか，結果的に一部の子どもたちしか反応しない課題になってはいないかをふりかえることが必要である。

②課題解決に向け，子どもたちが確かな考え（方法）をもつための支援

○何度も読む，本文に線を引く，ワークシートに書く，話し合う，というひとつのパターンを身につけるようにした。←「なぜ」という理由・根拠を明確にする。

③より質の高い学習をめざしたふりかえりの場をもつための支援

○必ず毎時間，子どもたち自身の手でふりかえりをする場をもつ。
→学習内容だけでなく，学習の進め方について，ふりかえりができるようになった。
→自ら学ぶ意識が育ってきた。

●発達段階に応じたふりかえりの在り方（評価の在り方）を考える必要がある。

(2)　「学び合い」により学習の質的な高まりをめざして

○話し合いの方法・手順などが確立できるような支援・指導ができた。
→次第に子どもに任せるようにして，主体的な話し合いの場にしていく。

○話す・聞くことの学習を中心に，日常の場も利用してできるだけ多くの時間・機会をもつ。→発表の姿勢に変化。必ず発言しようとする意識。

●「学び合い」の内容が，子どもたちの意欲・関心に支えられているか。
←課題設定と同じで，話し合う価値のあるものを子どもが設定するのは難しい。

●活動が一方通行になったり，広がり・深まりに欠けるものになっていないか。

●「学び合う」姿・能力の評価をいかにすべきか。

これらの成果と課題をふまえた上で，これからの実践の方向性を探っていきたい。

本校でこれまで課題解決的な学習に取り組んできているのは，課題を解決していく過程で身についた力が教室という枠を越えて「実の場」ではたらく力となると考えているからである。従って，さらに学習の質を問い続けていかなければならない。

今後の研究を進めるにあたっては，次の３点についても考えていく。

・課題解決的な学習の低・中・高の系統的なつながりを再度吟味していく。
・課題解決的な学習のステップである「課題づくり」「見通す」「解決する」「ふりかえる」をさらに子ども主体のものにしていくための具体的な支援を探っていく。
・一つひとつの場で学んだことが全ての場で役立つように，学習活動を再編成していく。